

ペットの飼育経験の有無による人獣共通感染症の認知度およびリスク管理に関する調査

Questionnaire survey on knowledge and risk management of zoonosis
by different in animal husbandry experience

日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科 生野 佐織
Saori Shono, Nippon Veterinary and Life Science University

キーワード：人獣共通感染症、リスク管理、ペット飼育者、動物飼育経験
keywords : zoonosis, risk management, pet owner, experience with animals

1. 背景および目的

近年、ペットは家族という認識が高まっており、ペットと一緒に寝る、ペットとキスをするなど、動物と人が密接な関係となり物理的な距離が近くなっている¹⁾。こういった行為は、メンタルヘルスの向上、家族関係の変化、生活の質の向上など多くのメリットもある一方、過剰なふれあいを行うことで人獣共通感染症に感染する危険性が高まる。動物飼育者にとって自身および家族の身、またペットの身を守るために人獣共通感染症の知識は必要不可欠であり、人獣共通感染症に対する知識や情報を共有することは非常に重要である。また、動物園のふれあい場や小学校での学校動物飼育、動物とふれあえるカフェ、動物介在諸活動など、動物飼育者でなくとも動物と触れ合う場が多く存在し、動物飼育者以外にも人獣共通感染症に感染する危険性は十分考えられる。また、動物に興味がない人でも咬傷事故に巻き込まれる可能性もある。したがって、動物の飼育経験がないまたは興味がなくとも人獣共通感染症の知識を有していることは、人の安全また動物の安全を守るために重要となる。そこで本研究では、動物の飼育経験のある人および動物の飼育経験がない人の人獣共通感染症に対する認知度がどの程度あるのか把握し、また動物との接触時のリスク管理に関する調査を行い、動物の専門家である獣医師および愛玩動物看護師が正しい知識を伝えてい

く方法を検討することを目的とした。

2. 調査方法

アンケート対象は、動物関係の職種に就いている（または就いていた）人および動物関係の教育機関に在籍している（または在籍していた）人を除き、動物の飼育経験がある人および飼育経験がない人を対象とした。調査期間は、2022年9月1日～12月31日とし、調査方法は選択式（一部自由記述式）を用いた質問紙調査法で、インターネット上および紙面で作成した。アンケートの回収率は216件（100%）、有効回答数は195件（90.3%）であった。統計解析は、カイ二乗検定を用い、 $P < 0.05$ 未満を有意差有りとした（BellCurve for Excel、株式会社社会情報サービス、東京、日本）。

アンケート内容の概要は以下の通りである。

1. 動物の飼育経験の有無
2. “人獣共通感染症”の認知度
3. “人獣共通感染症”への興味の有無
4. 動物との濃厚接触の有無
5. 動物との咬傷事故の有無
6. 咬傷事故が起こった際の対応
7. 動物と接する際に意識していること

3. 結果および考察

3. 1. 動物の飼育経験の有無

動物の飼育経験がある人は 162 人 (83.0%)、飼育経験がない人は 33 人 (17.0%) であった。動物の飼育経験がある人 (162 人) の中で、犬および猫の飼育経験がある人は 126 人 (77.8%)、犬および猫以外の動物の飼育経験がある人は 36 人 (22.2%) であった。

3. 2. “人獣共通感染症”の認知度

「“人獣共通感染症”という言葉を知っているまたは聞いたことがあるか」を「はい・いいえ」の二者択一方式で質問した結果、「はい」と回答したのは全体では 25.1%、「いいえ」と回答したのは 74.9%であり、知らないと回答した人が有意に多かった ($P<0.001$)。動物の飼育経験の有無に関わらず、“人獣共通感染症”という言葉を知らないまたは聞いたことがないと回答した人が多い結果となった。一方、知っているまたは聞いたことのある感染症の種類に関しては、狂犬病を知っている人が全体の 97.4%を占めた。またその中でも、人獣共通感染症を知っている人の狂犬病の認知度は 100%であった。狂犬病は、日本では清浄国に指定されているが、国外で感染し国内で発症した際に TV やインターネットで大々的にニュースとして取り上げられることから、人獣共通感染症という言葉を知らない人でも狂犬病の名前は知っており、認知度が高いのではないかと推測された。また、その他の感染症では、動物飼育経験を有する人は知っている感染症の数が多く、自身の飼育する動物の種類が関係する感染症の認知度が高くなる傾向にあった。

3. 3. 人獣共通感染症についての興味

人獣共通感染症についての興味に関する質問には、興味があると回答したのは全体の 80%であり、興味がないと回答した人よりも有意に多く ($P<0.001$)、さらに動物の飼育経験がない人でも 72%は興味があると回答し、多くの人が人獣共通感染症について関心や興味を持っていることが分かった。動物の飼育経験者を対象に、動物病院を来院した際に人獣共通感染症について情報提供を行ってほしいかという質問に対して、「はい」と回答したのは 64.3%、「いいえ」は 0%、「現在飼育していないので来院する機会がない」が 35.7%であり、多くの人が獣医療関係者からの情報提供を望んでいることが分かつ

た。現状、動物病院に来院した際に、犬または猫であれば、混合ワクチンや狂犬病の説明を受けることはあっても、人獣共通感染症について詳しく説明を受けることはほとんどないと考えられる。“人獣共通感染症”をどこで知ったかという質問に対しても、TV が最も多く (47%)、動物病院で知ったという人は 22.5%しかいなかった (“人獣共通感染症”を知っていると回答した 49 人中)。

3. 4. 動物との濃厚接触の有無

「動物と濃厚接触をしたことがあるか」を「はい・いいえ」の二者択一方式で質問した結果、「はい」と回答したのは全体では 60%、「いいえ」と回答したのは 40%であった ($P<0.001$)。過剰なふれあいは人獣共通感染症に感染する危険性が高まる。実際に、飼い犬に舐められ *Capnocytophaga canimorsus* に感染したケースが報告されている²⁾ことから、動物との濃厚接触は健康であってもリスクが伴う。本調査の動物の飼育経験を有していても人獣共通感染症について知らない人が多いという結果を踏まえると、上記のような事例があることなど、濃厚接触の危険性が十分に理解されていないため、動物との濃厚接触を許容している可能性が考えられた。

3. 5. 動物との咬傷事故の有無

「動物 (動物種は問わない) から咬まれた・引っ搔かれた経験はありますか (軽度の咬傷も含める)」を「はい・いいえ」の二者択一方式で質問した結果、「はい」と回答したのは全体では 69%、「いいえ」と回答したのは 31%であった ($P<0.001$)。咬傷事故の経験が最も多かったのは、犬または猫の飼育経験者 (108 人) であり全体の 55%にも及んだ。動物との咬傷事故では、犬および猫によるものが多く³⁾、今回の調査結果も同様に、咬傷事故の経験がある人の中では、犬および猫の飼育経験ある人の咬傷事故の経験数が多かった。咬傷事故を防ぐためには、ペットに対するしつけトレーニングだけでなく、人に対する教育も効果的であることが示されている⁴⁾。現在、動物病院ではパピートレーニングやしつけ教室などが行われているが、このようなペットに対するトレーニングと共に飼い主や飼い主家族に対する咬傷事故防止の教育プログラムを作成し、ペットのトレーニングと同時に実施することで、犬および猫の飼育者に対する

濃厚接触および咬傷事故防止が期待できるのではないかと考えられた。

3. 6. 咬傷事故が起こった際の対応

咬傷事故を経験した人を対象に、「咬傷事故が起こった際に病院を受診したか」という質問をした。「受診した」は7%、「受診していない」と回答したのは93%であり、受診していない人が有意に多かった ($P<0.001$)。「咬傷事故が起こった際に正しい対処法を知りたいか」という質問に対しては、「知りたい」は83%、「すでに知っている」は10%、「知りたくない」と回答したのは7%であり、正しい対処法を知りたい人が多いことが分かった。動物との咬傷事故は、傷が自然に治癒することもあるが、人獣共通感染症に罹った場合重症化する可能性は少なくない^{2, 5)}。したがって、動物に咬まれたまたは引っ掻かれた場合は、傷の重症度に関わらず病院を受診すべきである。動物との生活の中で咬傷事故が起こらないようにすることも必要であるが、咬傷事故が起こった場合にどう対処をすればよいか、病院に行った方がよいのかなど正しい対処法を普及させていく必要があると考えられた。

3. 7. 動物と接する際に意識して気を付けていること

「動物と接する際に気を付けていること」を質問したところ（複数選択可）、「特にない」と回答したのは全体の30.8%であり、動物の飼育経験のある人の中（162人）で「特にない」と回答したのは30.9%、飼育経験のない人（33人）では30.3%であり、動物の飼育経験に関わらず、動物と接する際に濃厚接触や咬傷事故に繋がらないよう意識している人が多いことが分かった。特に意識して気を付けていることが多かった項目は、食器の共有をしない（39%）、キスをしない・顔を近づけない（38%）、動物を触った後に手を洗う（52%）、野生動物と接触しない（38.5%）であった。しかし、動物の飼育経験がある人の半数以上の人が意識的に実施していない項目が多かったため、動物を飼育している人に対しては、動物病院に来院した際、動物病院スタッフが動物との接触に関する注意喚起を行う必要があることが示唆された。また、動物病院スタッフだけでなく、動物園や動物関連施設、動物介在諸活動などの関係者が一般の方に注意を促すなど、動物を飼育した経験のない

人にも正しい動物との距離感や接し方を伝えていく必要があると考えられた。

以上より、動物の飼育経験の有無に関わらず人獣共通感染症に関する認知度が低く、動物との濃厚接触や咬傷事故が多いが、感染症や咬傷事故の対処法に関する知識が不十分であることが分かった。また、獣医師や愛玩動物看護師は、飼い主や一般の方に対する知識の共有の重要性を広く伝え、適正飼養の啓発に寄与しなければならないが、現状実施されていない可能性がある。本調査結果から、人獣共通感染症に関する情報に興味を持っている人が多いことが明らかとなったため、獣医師や愛玩動物看護師が動物病院で開催できる飼い主向けのセミナーなどを行う機会を設けることで感染症に対する意識が高まり、飼い主の適正飼養の一助になると考えられた。さらに、日常的に動物と関わることがない人に対しても気軽に参加できるセミナーや講演会を開催し、人獣共通感染症に関する知識を深め、多くの国民と動物が、共に安全に安心して生活できる環境を作っていく必要があると考えられた。

4. 引用及び参考文献

- 1) 松田光恵、ペットは家族とみなせるか(2)－飼育経験の有無が与える影響－、2017、くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要、50：51-66.
- 2) Yang M.C., Ling J. and Mosaed S. Capnocytophaga canimorsus blebitis: case report and review of literature. *BMC Ophthalmol.* 2021. 21: 59.
- 3) Ostanello F., Gherardi A., Caprioli A., Placa L. L., Passini A and Prosperi S. Incidence of injuries caused by dogs and cats treated in emergency departments in a major Italian city. *Emerg. Med. J.* 2005. 22: 260-262.
- 4) Duncan-Sutherland N., Lissaman A.C., Shepherd M. and Kool B. Systematic review of dog bite prevention strategies. *Inj. Prev.* 2022 28: 288-297.
- 5) Gaastra W. and Lipman L. J. Capnocytophaga canimorsus. *Vet Microbiol.* 2010. 140: 339-46.